

前回(10/11)のサムエル記上21章からダビデの生涯にとって、大きな区切りとなったサウル王からの逃亡の生涯が始まった。

### I. アドラムの洞窟(1~5節)

さて、ペリシテ人の町「ガト」への亡命に失敗したダビデがやって来たのが、ベツレヘム南西約18kmの「アドラムの洞窟」であった。それを聞いた「ダビデの兄弟や父の家の者は皆、彼のもとに下って来た」(1節)。彼らはダビデの血縁ということで、サウル王からいろいろの形での圧迫があったからであろう。

その他、「困窮している者、負債のある者、不満を持つ者も皆彼のもとに集まり」ということで、ダビデのもとには「四百人ほど」の人々が集まるようになった(2節)。後にその数は「六百人」になった(23:13)。

そこでダビデが心配したのは、年老いた両親を連れての逃亡であった。そこでダビデは彼の先祖にモアブ人ルツがいた誼(よしみ)を頼り、隣国モアブの王に保護を依頼した(3~4節)。そのためダビデは両親を連れて、アドラムから南東方向に進み、死海を渡りホロナイムの坂を上ってモアブの首都ミツパに着いた。

### II. 祭司アヒメレク一族の悲劇(6~19節)

一方、単身逃亡したダビデが数百人の群れとなったのを知ったサウル王は、相当焦っていた。また中々ダビデを逮捕出来ない不満を部下にぶちまけた(8節)。

それを聞いて「エドム人ドエグ」が、ダビデ王に対して忠義心を示すために、ノブの祭司アヒメレクがダビデに対して、パンを与え、ゴリアトの剣も与えた親切な行為(21:1~8)を目撃したことを、サウル王に密告した(9~10節)。

それを聞いたサウル王は直ちにアヒメレクを始め、祭司一族全員を呼び出し、アヒメレクの行為は自分に対する反逆行為であると責めた。

これに対して祭司アヒメレクは恐れることなく、堂々とダビデを次の四点から弁護した。

- ① ダビデの人格人柄から、「ダビデほど忠実な者がいるでしょうか」(14節 a)
- ② ダビデの身分から、「王様の婿、近衛の長、あなたの家で重んじられている」(14節 b)
- ③ 前例や慣例から、「あの折が始めてでしょうか」(15節 a)即ち、前にもあった事ですと。
- ④ 政教分離の立場から、「何も知らなかったのです」(15節 b)即ち、祭司は政治的なことには関わっていませんと。

しかし、この様な理路整然とした弁明もサウル王には通じなく、密告したドエグに祭司一族全員のホロコーストを行わせた。

### III. 生き残ったエブヤタル(20~23節)

しかし、祭司アヒメレクの息子だけは難を逃れて、ダビデの許に逃げ込んできた。そのエブヤタルに対するダビデの慰めのことばが、「わたしのもとにいれば、あなたは安全だ」(23節)だった。私達もイエスのもとにいれば、安全なのです。

